

高野山大学図書館蔵（金剛三昧院寄託） 『南海流浪記』の翻刻と紹介

木下華子

はじめに

本稿は、高野山大学図書館蔵（金剛三昧院寄託）『南海流浪記』について、翻刻と紹介を行うものである。『南海流浪記』は、高野山正智院の阿闍梨であり、同山の八傑として名を馳せた道範（一一七八―一二五二）の記録をもとにした紀行である。

仁治三年（一二四二）、高野山金剛峯寺と大伝法院（根来寺）の抗争は、金剛峯寺側の衆徒による大伝法院焼き討ちという事態を引き起こした。嘉永三年（一二三三）以降、高野山執行であった道範は、この一件による訴訟に敗れ、翌年正月、讃岐国に配流されることになる。赦免は、六年後の建長元年（一二四九）であった。この訴訟の顛末・配所へ

の道程・讃岐国での足かけ六年に及ぶ生活・赦免から高野山帰山までの復路の様について、道範が記した漢文体の記録（日記のようなものか）があり、道範没から六年後の正嘉二年（一二五八）、そこから後人が記事を抄出して編集したものが、現『南海流浪記』である。抄出者は不詳だが、道範の門弟など高野山の学僧を想定するのが自然だろうか。

母体となった道範の記録は失われているが、金剛三昧院本の奥書によると、書写した内容の他、「種々事等」が「多く存したらしい。実際、作品中には寛元四年（一二四六）―宝治元年（一二四七）の三年間の記事はなく、仁治四年の往路・建長元年の復路の他、弘法大師空海の聖跡たる善通寺に関連する記事（伽藍や寺宝の詳細・御影の模写や誕生院の建立についてなど）が頻出、さらに、讃岐国の諸寺院（尾

背寺・称名院など）への参詣や白峯寺での入壇伝法記事が見られることから、記事の抄出には高野山側の意図があったことが予想されよう。このことについて、高橋徳・安藤みどり・佐藤竜馬「史料紹介『南海流浪記』洲崎寺本⁽¹⁾」が述べる「讃岐滞在時の道範の業績を顕彰することに取捨選択の基準があつた」との想定は、首肯すべき見解だと考えられる。

すなわち、『南海流浪記』とは、第一次の記録から記事の取捨選択が行われ、何らかの意図に基づいて編集されたという成立過程を有する作品ということになる。このようなプロセスは、中世の紀行文に対してある程度敷衍できるものではないだろうか。選択や編集を行うものが旅人たる自身か他者かという違いはあるが、『南海流浪記』とは中世の一大ジャンルである紀行文を把握する上で、一つの鍵となる作品なのではないかと推測できる。

『南海流浪記』の伝本については、国文学研究資料館の日本古典籍総合データベースや先行研究を参照すると、凡そ以下のようにまとめられる。

「1」写本

- ①高野山大学図書館蔵（金剛三昧院寄託）本（慶長二年（一五九七）、良学房英義の書写奥書）

- ②洲崎寺蔵本（金剛三昧院本が、江戸時代に入つて書写されたもの）

- ③祐徳稻荷神社中川文庫蔵本（鍋島直条編『桑弧』中。元禄七年（二六九四）頃書写）

- ④大東急記念文庫蔵本（明和三年（一七六六）、滋野井公麗筆本）

- ⑤大阪天満宮蔵本（近世末期の書写か）

「2」版本

- ⑥天和二年（二六八二）刊

- ⑦群書類従（安永八（一七七九）〜文政二（一八一九）年頃）

- ⑧嘉永四年（一八五二）刊

- ⑨嘉永五年（一八五二）刊

- ⑩刊年不明

写本については、現存本のうち最古の書写奥書を持つのが、本稿で取り上げる①金剛三昧院本である。また、②は高松市牟礼町の洲崎寺に伝来する写本だが、前掲の高橋・安藤・佐藤の報告により、①親子関係にある写本だと指摘される（①の表紙を見返しに書写、奥書は同一の内容を有す）。③祐徳稻荷神社中川文庫蔵本は、奥書を有さない。④⑤は未見である。また、版本については、⑦群書類従本と⑧嘉永四年（一八五二）本は①と同一の奥書を有しており、本

文に異同はあるものの、①系統に位置するものと捉え得る。
⑥は本文末尾に「建長九年八月十七日」の年時記載を有し、天和二年五月大坂呉服町深江屋太郎兵衛の版である。同様の年時は他本では確認していない。⑨⑩は未見である。

粗描ではあるが、以上の確認を踏まえると、金剛三昧院本は『南海流浪記』伝本の祖本に位置づけ得る写本だと考えられる。『南海流浪記』については、群書類従をはじめとする複数の活字翻刻や先述の高橋・安藤・佐藤の報告が存在するが、金剛三昧院蔵本の資料的な価値を鑑み、本稿では全文翻刻と改めての紹介を行うこととする。なお、本稿末尾に、『南海流浪記』に見える道範の行程を記した表を置いた。一助としていただければ幸いである。

一、解題

高野山大学図書館蔵（金剛三昧院寄託）『南海流浪記』の書誌は、以下の通りである。

〔函架番号、一―五五／ナ金／八。写本。一冊。袋綴（後述）。縦二五・〇センチメートル×横一七・八センチメートル。楮紙。外題、「南海流浪記」（表紙左肩に打ち付け書き、墨書）。内題、「南海流浪記」。一九丁（墨付一七・五丁）。一面八―一行。一首一行書。蔵書印はないが、表紙左下に「金剛三

昧院」と墨書。奥書、「此事写之外種々事等多之」右筆^二不遑／仍略之^一殊以為肝要之所許を事脱ノ于時／正嘉第二之曆件状上旬之候聊為後／摸之執筆了巧披見候可被唱念仏者也／私云建治三年二月十八日書写了。これによると、道範の記録からの抄出は正嘉二年（一二五八）に行われ、当該本の親本は建治三年（一二七七）二月一八日に書写が行われたことになる。

また、表紙には、外題の他に「慶長二年〔丁／酉〕卯月五日／函三十木／十九／英義良学房／智莊嚴院／入寺政印」（傍線は墨の合点と記されており、「三十六」の抹消線と「十九」は朱書。墨の色は次の三種類に分別できる。

- 1、年月日・外題・「英義良学房」
- 2、「智莊嚴院」「入寺政印」
- 3、三本の合点と「金剛三昧院」「函三十六」

三種類の墨が使い分けられていることから、以下のような推測が可能であろう。当該本は、慶長二年（二五九七）四月五日に英義良学房による書写を終え、後に智莊嚴院（高野山西院合の学侶方子院）に所蔵された。その後、いつのころかはわからないが、金剛三昧院の所蔵となったということである^③。

料紙には四つ穴の跡が残っており、装訂は、もと袋綴だ

ったかと考えられる。現在は、ノドのぎりぎりのところで四つ穴で糸綴じし、一枚の紙（表紙・裏表紙）でくるむような体裁である。

表紙裏に、「十六日立大谷／至麻生津十一里」と墨書した小紙片がはさみこまれている。「麻生津」は紀ノ川南岸、飯盛山北麓にあった莊園であり、承久年間頃には高野山領になったと考えられている。帰路にあたる建長元年（一二四九）は、八月一五日に大谷にいたり、一七日に高野山に帰参しているため、この小紙片は、間の一六日の記事だと考えるのが妥当であろう。由来は不明だが、一六日の部分が何らかの形で伝わったものかと思われる。さらに、一一丁裏に「江」と墨書した小紙片、一六丁裏に「す」と墨書した小紙片（茶色の紙）がはさみこまれている。

なお、金剛三昧院本は、作品の前半、仁治四年二月一日～一日にかけての記事に注意すべき異同を有す。金剛三昧院本の本文は「十日フクラヲ立て阿波の戸をわたりて佐井田ニ^ニル海路三里餘嶋々入江く^くの有様悦目養意^舟ヲリテ阿波国^ノ大津賀^ニ至る路間九里餘」だが、例えば③祐徳稻荷神社中川文庫蔵本では、「十日ふくらを立阿波戸をわたりて佐伊田にをる」「海路三里余」嶋々入江に宿／十一日大寺を立て大坂をして讃岐をあひの中の山なか／の有

様悦^メ目^レ爰に船をりて阿波国板東郡大寺大津賀に至^ル「路間九里与」^⑧となる。⑧嘉永四年版本では「十日ふくらを立て阿波の戸を渡テ佐井田に下る海路三里餘嶋々入江々々有様悦^メ目^レ養^フ心^ヲ船を下^テ阿波ノ国板東郡大寺ニ宿^ス／十一日大寺を立て大坂越して讃岐阿波の中の山なる^{サヌキ}大津賀に到^ル。路間九里餘^リ」である（⑦群書類従本も、異同はあるが⑧と同様）。金剛三昧院本及び親子関係にある②洲崎寺本は、傍線部の情報を有さない。諸本により差はあるが、傍線部が言うところは、佐井田と大津賀の間に、阿波国大寺から大坂越えをしたという経路だろう。③の「大坂を」は「越」を「を」の字母と見間違つての誤写かと思われる。

「大津賀」という地名は『南海流浪記』当該箇所以外に見出せず、現在の地名の同定が困難だが、阿波国から讃岐国への道程に大坂越えがあることは周知の事実であり、阿波国大寺から大坂越えの後に讃岐国に配流という道筋は自然である。ただし、③⑦⑧の本文に揺れがあること、⑦は①②の系統の本を底本として校訂が行われたことを考えると、傍線部は早い段階で本文に混乱が生じていた箇所かと思われる。現時点では金剛三昧院本の脱文か後の増補かということとは結論せず、異同の指摘に留めておく。

二、翻刻

〔凡例〕

底本は次の基準に従い翻刻した。

- 1、本文は底本の書写形式を忠実に伝えることを主眼とし、漢字・仮名遣い・量字等、底本のママとするが、用字は原則として通行字体によった。漢字は一部を除き通行の新字体を用い、仮名も通行字体を用いる。
- 2、本行本文の改行は底本のママだが、改面は、(1オ)「(10ウ)」の形式で示した。
- 3、割書は「」内に入れて表し、割書中の改行は／で示す。
- 4、訓点と送り仮名は、底本のママの大きさを示す。
- 5、合点は、右の傍線にて示す。
- 6、抹消線は取り消し線、見せ消ちは左の傍線にて示す。
- 7、本文中に空白がある場合、字数分の□で示す。

【表紙】

慶長二年「丁／酉」卯月五日

函 三十木

英義良学房

十九

智莊嚴院

入寺政印

南海流浪記

金剛三昧院

【本文】

南海流浪記

仁治三年「壬／寅」七月十三日本寺、訴詔経

年月而不達末院凶惡忘本末而興

盛之間本寺、衆徒企発向欲治罰^{セント}

彼、凶党^一之処天火自然^三出順風歟爾^二

起^テ一院須臾^二成灰燼^ト一畢同月、末

公家被召当時、檢校^ヲ一八月、始企^二上洛^ヲ一

即被^レ召^二其惡行、張本^ヲ一之旨注^二進彼^一

骨張十人、交名^ヲ一之間注進此十人就^二長者^一

尽被召上了同年十月、末任^二伝法院

注進、交名^二一、本寺、宿老等廿六人召符

被下之十一月十八日参六波羅之処即

各被預武士^二了同下旬日々^二有両方、

対問伝法院巧出^シ龜毛^ノ條々^ヲ一構申

詐偽、非論雖然空花濫訴故一々

無実之旨顕申如対決者不可及罪科^二

之由令謳歌之処仁治四年正月之比
三十余人尽可処配流之由令風聞爰
宿老等都^テ迷^ヒ子細忽亡東西以一両、

悪行只被押懸宿老者不可及一言、

問答^ニ就両方、理非若被糾明者不可処

一刑罪科是只所詮当彼、一院磨滅ノ時、

運^ニ一感^ニ此宿老等ノ宿惡之業ヲ一歎唯察

因果ノ理勿生怨恨ノ思^一矣同四年正

月廿五日各被預配流国武士了道範

流讃岐守護所不在京付淡路守護所

四郎左衛門殿可令下国之由有^ニ其沙汰^一

即正月卅日出都宿久我^ニ二月一日乗船

宿神崎橋下^一過淀渡之時遙花洛ノ方ヲ

瞻望^{シテ}

都をは霞のよそにかへりみていつち行らむ淀の河波

同二日神崎ヲ立筒井^ニ至^ル路ノ間五里小屋

福原^ヲ過^ク同三日筒井ヲ立石屋ノ渡ヲ^{リテ}

宿石屋^ニ一路間六里餘スマタルミヲスキスマノ浦、

気色誠^ニ月ノ名所ト見ヘタリ東南氣霽

出山之清光可望西北海遠^{シテ}入浪之暁月

可見ッ

(2ウ)

流行く身にしあらずはすまの浦とまりて夜半の月は見てまし
同日夕方巡^ニ見^{スル}石屋并絵嶋ヲ一青巖之形

緑松之ノ林碧潭之色晚嵐之声其感

興忘愁緒ヲ了即絵嶋の明神^ニ詣^{シテ}

法施法衆

見るはかりいか、かたらむ絵嶋かたむへしを神は爰にすみける

四日岩屋ヲ立^テ乗船瀧ノ口ニイタリテアル海路七

里海路の様西ノ淡路嶋臨行奇巖滑

石宛如見山水ヲ一東ノ千里青山メモ遙^ニ

遠^シ其ノ中ニ眺望ノ末ニアタリテ幽^ニ高野山

見ゆ山門寺中ノ事なんと思やられて

あはれに覺へて舟中ノ人々ニあすよりは

高野の見ゆる所は有間敷歟と問へは淡路

の山の中に入候なは高野のみゆる所は今ハ

よも候ワシといふをきゝて

はなれ来る高野の山のかすみをもけふ斗やはなかめくらさん

同日船を下て陸地三里行て淡路

同府^{ハ本}ニ至^テ中一日ヲ経^{タリ}石屋ノ宿までは淡路

配国ノ人同道同宿之間互世出世之事等相談^{シテ}

なくさむ事あり件人ハ瀧ノ口ニとまり又此八

木ノ宿よりは只同朋一両輩斗也羈旅ノ

(3ウ)

思まことに心ほそし

(4オ)

さらぬたにね覚おほかる草枕まところむ夢をふく嵐哉

六日同府を立三里行てフクラノトマリニ至る

風あらくして三ヶ日逗留西風はけしく時に

雪ふゝきてすさましく物あはれなり

おきつ風ふくらかいそに日数経てならはぬ浪にぬるゝ袖哉

行さを我か古郷にあらなくに爰を旅とは何いそくらん

十日フクラヲ立て阿波の戸をわたりて

佐井田ニナル海路三里餘嶋々入江くゝの有

様悦目養意一舟ヲリテ阿波国ノ大津賀ニ至る

路間九里餘

(4ウ)

十二日サヌキノ国府ニ至る路間六里庁ノ沙汰トシテ

有祇候次日六里伝馬

十三日国府ヲ立讃岐ノ守護所長雄二郎左衛門ノ

許ニ至ル路間二里次朝淡路ノ使者帰る淡

路ニとゝまる人ノもとへ其国より以来多ノ山海ヲ

渡テ流浪之事并老後流刑之事

返々モ不斗之由ナムト申テ

天かしこ何すみそめの袖ならん老の波にも流れぬる哉

(5オ)

十四日守護所之許より鵜足津ノ橘藤左衛門

高能と云御家人之許へ被ル預ケ

十五日在家五六丁許行上リテ堂舎

一字僧坊少々有所ニ移シスエラル此処地形

殊勝望レ東孤山擎テ夜月ヲ勸ニ月輪観

之思ヲ一顧レ西遠嶋含夕日ヲ催ニ日想観之心一

後ロニハ松山聳テ海中ニ至る前ハ潮満ツ時砌

近ク指シ入ル

さひしさをいかてたえまし松の風浪も音せぬ住家なりせは

(5ウ)

サテ常に後の山ニ登リテ海上嶋々を眺望シテ為ニ

海中鱗類ノ一作ニ自性能加持之法ヲ一有時は

浦ニ出テ向ノ山々ヲ問へは備前ノ小嶋備中備

後返テ見ヘ渡る小石ニ光明真言等ヲ書テ

海中ニ入ル宝筐印陀羅尼ヲ誦シテ鱗類ノ離苦

海ニ廻向ス或時山ニ登テ見わたして

うたつかた此松かけに風たては嶋のあなたも一ッ白浪

三月廿一日善通寺ニ詣テ大師ノ聖跡を

巡礼ス金堂ハ二階七間也青龍寺ノ

金堂を被タル模トテ二階ニ各今少引入リテ

モコシアルカ故ニ打見レハ四階大伽藍也是は

大師御建立于今現在セリ御作丈六葉師

(6オ)

三尊四天王像います皆埋込也後ノ壁ニ
又葉師三尊半出ニ埋作ラレタリ

七間講堂ハ破壊後今新造御作釈迦像イマヌ
造宮五間常
本ハ法華堂ト云

堂同新造立大師御建立ニ二重ノ宝

塔現存本五間令修理之間加前広廂一間「云ノ々」(6ウ)

於此内「在」安ニ置御筆ノ御影ヲ此御影ハ大師

御入唐之時自図之奉預御母儀「云ノ々」同

等身像「云ノ々」大方ノ様ハ如普通ノ御影ノ但於左

上松山ノ上ニ釈迦如来影現ノ形像有之「云ノ々」凡

此善通寺ハ本ハ四面各二町其内種々ノ堂

舍宝塔灌頂院護摩堂嚴重羅列ス今ハ

皆破壊シテ纔ニ礎石斗在之ニ御筆之額ニ

枚有之ニ皆善通之寺トアソハサレタリ

其外大宝楼閣陀羅尼トアソハシタル額ニ

枚有之皆破損「云ノ々」抑善通之寺ハ大師御先

祖俗名ヲ即為寺号「云ノ々」破壊之間大師修造

建立ノ時不被改本号歟金堂ノ西ニ有一直

路一町七文許也即自寺中參御誕

生所之路也則參詣シテスレハ之ヲ正御誕生

所ニハ石高ク広畳タメリ今ハ如法經奉納

之七重石塔有之ニ大樹少々有之ニ拝見之

間悲慕恭敬催涙折膽

高野山岩のむろ戸に澄月の此ふもとより出けるかそもイ

(7ウ)

此御誕生所ハ西方ニ五岳山ト云テ五仏之高山ノ

有ル其麓也同日午刻於講堂ニ一有

法花講大師御報恩「云ノ々」其後有童

舞「云ノ々」其日及曉景不殘還向即通ニ

夜御影堂ニ云々翌日宇足津ニ帰寛

元々年九月十五日善通寺ニ移住ス

寺僧等兼テ大師御誕生所ノ傍ニ庵室

を構テ給ヘリ同月廿一日大師至ニ御行

道所ニ一世ニ号世坂ト參詣ス其嶮岨嵯

峨老骨雖攀路只人ニタスケラレテ登至る

此行道ノ路ニハ于今草不生ニ清淨寂寞ハケタリ

南北諸国皆見テ眺望疲眼此行道所ハ五

岳ノ中岳ノ我拝師山ノ西ノ岫也大師此処ニ觀念

經行之間中岳青巖ノ緑松ノ上ニ釈迦如

來乘雲來臨影現玉ヲ大師拜玉ヲ之故

云ニ我拝師山ト也此行道所ニ数刻大仏頂

宝篋印等陀羅尼ヲ滿テ眼処及海生山

獸等ノ養生ニアツ如来影現事貴ク目出

(8ウ)

(8オ)

覚へテ

わしの山つねにすむなる夜半の月来りて照す峰にそ有ける

十月の比南大門^ニ出^テ南方名山等眺^ニ望南

大門前ノ路弘三丈五尺長八町左右^ニ卒都

婆多立之^ニ其門ノ東脇^ニ古大松アリ寺

僧云昔西行此松ノ下^ニ七日七夜籠居^テ

ひさに経て我か後の世を問へよ松跡忍ふへき人もなき身そ

とよめるによりて此松^ヲハ西行^カ松と申也^ト申^ヲ

きゝて

ちきり置て西へ行ける跡に来て我れも終^ヲを松の下風

(9オ)

寛元二年「甲ノ辰」正月之比当寺ノ童舞装束被調事并会日發願文事同六月

十五日の夜多度郡田所入道「号堀池入道ノ随仏」夢

想^ニ云御誕生所ノ石壇ノ南ノ辺^ニ大ナル蓮花

生^{タリ}茎^{クキ}ノ長六尺許大衆合許初^ハ含^テ

漸開其色其香花甚妙也諸人集会^{シテ}

拝見之^ニ隋仏作^ニ奇特之想^ニ問云是何^{ナル}蓮

花^ツ如是^ニ大ニ妙なる人答曰是ハ高野上人御

房ノ蓮花「云ノ々」合掌瞻仰^{シテ}夢覺了同八月

之比淡路国^{ナル}人ノ許へ修行者ノ便^ニ文ツカワス

(9ウ)

状^ニ此離山三年^ニナリ在国両歳^ニナル事

本山恋慕羈旅ノ艱難定同心也抑其

淡路嶋^ハ高野ノ大門^ニチカ^クト見^テ侍^シハ

其国にても南山^ハサハ^ノト見侍ラム浦山

敷こそとて

君はなを見てやなくさむはなれぬる高野ノ山の峯の白雲

サテモ又此居所^ハ大師御誕生ノ聖跡なれば

御建立ノ伽藍于今少々現存就中大師

御真筆の御影常ニ拝見是愁之中の喜なる

由申て

(10オ)

世に出てみつからとむる影よりそ入にし月の形をも見る

已上両首の返し淡路

高野山峯の白雲跡絶てむなしき空に雨そこほる、

入月もひかりや其にならふらんみつからとめし影にうつりて

寛元三年十月廿一日出雲国配学円房

阿闍梨「法性」延^テ自サリ已死門之命^ヲ誓以廿

一日為閉眼之期^ト是大師引撰炳然也同

十二月十八日自本山告遣之聞之周章悶

乱悲泣哀慟彼阿闍梨者自少年同学也

交如芝蘭眼同膠漆加之受伝法灌頂

於先師法眼和上位既為秘密血脉一門顕密

(10ウ)

因縁旁以深離別哀傷豈以淺乎

仍自同十九日始行阿弥陀護摩^二五十ヶ日

泣資^三彼菩提^二其後自行念誦等々時為廻

向隨^一是為蒙彼還来引損也彼安芸

無常此出雲電光哀傷一意

かた／＼のものとしつくはちりぬ也いつか我か身の末の白露

同年十二月十六日高野浄菩提院阿闍梨「尚祚／覺禪房」

去十一月廿五日逝去之由同朋来^テ告未^レ聞^ニ終

其詞「嗚咽悶絶彼阿闍梨者花王法水

稟源禪林ノ教風伝心因之事相教相互開^二

蒙霧^一世間出世俱無^二内外^一矣彼賢哲者

具質^二一紀之法弟也而冥途前後泣而

有^二餘凡一山学徒滅法燈失患日為之

如何「云／々」筆与淚相和記之

高野山流れし水もかれぬ也草木よいか、たねをきさ、ん

宝治二年「戊／申」四月之比依高野二品親

王仰奉模当寺御影此事去年

雖被下御使「当国無^二浄行仏師^一」之由依申

上今年被下仏師「成祐「鏡明房」奉模写

之所詣仏師四月五日出京九日下着堀仁

津同十一日当寺参詣同十三日作紙形当

〔11ウ〕

於日御影堂「仏師^二授^二梵網十戒其後始紙

形自同十四日「図絵同十八日終其功所奉模

之御影其御影形色豪釐^モ無違^二本御影^一「云々

同十八日依寺僧評議今此仏師改押本

御影之裏加御修理「云／々」已上此等間不出御影

堂仏師下着之時「院主／絹一疋」□□「三昧各浅黄／一切

給了」

〔12オ〕

凡此御影者当寺之古老相伝^二云大師御入

唐ノ時為御母儀^一「自模置我影像^ヲ」為告面

之孝御^ス「云／々」

此御影堂上洛事

承元三年隱岐院御時在佐大臣殿当

国^三司之間依院宣被奉迎寺僧再三曰

上古不奉出御影堂^一之由雖令言上子細

数度依被仰下寺僧等頂戴令上洛御

拝見之後被奉模之絵師御下向之

時生野^ノ六丁免田寄進「云／々」嘉禄元年九

条禪定殿下撰録御時奉拝之又模写之^{絵師七郎時人}

御下向之時免田三丁寄進「云／々」

同年六月二日御上洛同十五日高野参着即

有御拝見「御歡喜「云／々」同十八日御報書「云／々」御影無為

奉渡事返々悦入候宿善開発数及落涙

心中可被察候「云／々」同年十月廿七日伊与

国寒川ノ地頭「小河六郎ノ祐長」建^ニ一堂三尊^一供養

導師勤之彼路頭^ニ比女ノ八幡^ト云所^{アリ}讚岐ノ

内其所^ニ大楠ノ木ノ本^ヲ半出ノ阿弥陀仏^ニ造^テ堂^ヲ

ツクリ覺^リ其本ノ末ハ大ニサカヘテカレヌ

楠の木も本のさとりをひらきつゝ、仏の身とも成にける哉

同廿八日舞樂同廿九日還向^カ次^ニ琴曳と

「云宮マウツ「讚岐内」此宮ハ昔ハ幡大菩薩筑紫

より此処^ニヲチツキテ京ノ八幡^ヘわたらせ給

其御舟ノ舶^ト御琴^ト宮内^ニツクリコメタリサテ

琴曳^ト云山ノ様京ノヤハタノ山ノ形也三面^ハ海也

殊勝地形

松風に昔のしらへかよひ来て今に跡^{アト}ある琴曳の山（13ウ）

同年十一月十七日尾背寺参詣此寺ハ大

師善通寺建立之時杣山「云／々」本堂三間四面

本地御作薬師三間御影堂御影^并七祖又

天台大師影在^ス之^一同十八日還向依路次

参詣称名院眇々松林中有九品庵室本

堂五間彼院主念念房持仏堂松間池

上地形殊勝彼院主他行之間追送之

九の草の庵りと見しほとにやかて蓮の台成けり

九の草の庵りにとめをきてこゝろいさなへ海の西まで

念々房返

結ひ置く草の庵のかひあれば今は蓮の台とそきく

九の草の庵りにと、めけむ君か心をたのむ我身そ

称名院への愚状を上品房の許へ被^レ送タリケル

其返状^ニ云

善通寺御札加拝見令返上候彼歴覽之時

不参会之条生前遺恨候猶々御光臨候者

我願充滿衆望亦可足候者也兼亦二首

御詠万感無極候捧五首之腰折述千廻之

心緒而已

君ならて誰か覺らん草の庵やかて蓮の台成とは（14ウ）

九品の蓮の露にやとりけん月の光りを見ぬそかなしき

と、めけん心の底をしるへにて此山さとに住人もかな

いか、して君か御法の灯を闇き深山の庵に照さん

君かたのむ寺の昔の聖りこそ此山里に住家しめけれ

当寺は弘一大師御建立旧跡「云／々」便宜之時以此

旨可令洩達給恐々謹言

十二月十四日

上品判

十一月十八日参詣瀧寺「坂十六丁此寺東向」

高山有瀧古寺礎石等所々有之一本堂五間本
仏御作千手「云／々」

(15オ)

一誕生院縁起之事

右当所者弘法大師御誕生処也昔ハ定テ有

精舎宛^モ如釈迦如来淨飯王宮生処塔^ヲ一

而五百廻^ノ星霜相遷之間唯遺基跡^ヲ尚

無礎石于茲行蓮上人去寛元三年木

像御影建立之時即与寺僧共評儀^{シテ}

於此御誕生所建立一堂^ヲ可安置之「云／々」

因茲或^{ハケマシ}勵自力^ヲ或唱^テ勸進^一以今年建長

元年正月十日^一手斧始同二月二日棟上

大工沙弥陀仏同年五月八日「戊／申」寅時有

鎮壇阿闍梨道範

以我功德力大師加持力及以法界力願我成吉祥

今此一伽藍奉慈氏下生興隆諸仏法利益諸衆生

大勸進阿闍梨道範

建長元年五月廿一日此諸国流人赦免之宣

下有之^一同六月八日件院宣并六波羅

下知状及長者御房御書状来着仍即可

帰洛之処自同十二日本病更^{ハツ}発不能出行^一

經四十餘日付小減臨^ニ帰山之期七年之間

(16オ)

世出世之事無内外申談之人之許へ申遣云
七年之絶^え不ぬむくひの末の露

おなしはちすの上にあそはん

彼返報云七ヶ年之祇候一生中之大

幸也唯頼世々^ニ欲蒙御引撰「云／々」

末の露おもひ定めぬ身にしあれと問ふことはにかゝらざらめや

追伸御帰山之後^ハ毎年度可令登山之志深候

たのめ置し法のしるへの灯の重而照す峯を尋ん

同七月廿二三日之比癘病得小減欲帰山之処

当国白峯寺院主静円「備後阿闍梨」当年

宿願入壇所望事近々被歎申之間病

後氣力雖不可堪作業此寺国中清淨

蘭若崇徳院法皇御靈廟也此阿闍梨

年紀六十六練行慈仁之器也仍大師御門

流於此寺永代流伝事尤可為興法利

人方便之故同七月廿九日立善通寺到

彼白峯「路五里」八月四日「壬寅／房宿舎云々」入壇伝法

色衆十人「云／々」同六日彼寺本堂修理供

養万茶羅供大阿闍梨勤之此間雖厓

弱不虧法則同七日立白峯至白山「路／六里」

同八日立白山至引田「路六里」同九日立引田

(17オ)

(16ウ)

越阿波大坂至紀津「路六里」即日酉始乘船

渡牟野口付福良「海路／四里」即子時許至淡路

国賀集「一里」同十四日立賀集至由良「七／里」

同十五日立由良渡戸又云加多渡「海路／三里」至大谷「亥時／陸地

十一里」
(17ウ)「

同十七日登山路即日沒後開御影拝見慈

顏頂戴御物等拭歛喜涙着住坊「云／々」

同廿一日奥院參詣病身忘命參詣之

処上下無為不可□□「云／々」

此事写之外種々事等多之「右筆」不違仍

略之「殊以為肝要之所許を事脱諸條」于時

正嘉第二之曆件状上旬之候聊為後

摸之執筆了巧披見候可被唱念仏者也

私云建治三年二月十八日書写了

(18才)「

【付】『南海流浪記』に見える道範の行程

* 仁治四年（一二四三）二月一〇日～一日にかけての「」内の記事は、嘉永四年版本によって補う。

| 元号 | 西暦 | 月日 | 道範に関する記事 | 和歌 |
|--------------------------------|------|--|--|----------------------|
| 仁治三年 | 一二四二 | 7月13日 7月末 8月頭 10月末 11月18日 11月下旬 | 金剛峯寺側、伝法院を焼討。 朝廷が高野検校を召喚。 高野検校上洛（道範もか）。 金剛峯寺の長老等二六名、召喚される。 道範ら、六波羅探題に参上。 金剛峯寺・伝法院双方の対問。 | |
| 仁治四年 ←寛元元年 * 2/26 改元。 | 一二四三 | 正月頃 正月25日 正月30日 2月1日 2日 3日 4日 6日 10日 12日 〔11日〕 | 金剛峯寺の三〇余名が流罪との噂が流れる。 道範、讃岐国に配流と決定。 都を出立し、久我に宿る。 乗船。淀川を下り、神崎に宿る。 神崎を出立、昆陽・福原を過ぎ、筒井に至る。 筒井を出立、須磨・垂水を過ぎて、石屋に至る。夕方、石屋と絵島を巡見。 石屋を出立、乗船。陸路を経て、淡路国府（養宜）に至る。 国府を出立、福良に至る。悪天候で三日逗留。 福良を出立、阿波国佐井田に至る。 〔坂東郡大寺に宿る。〕 〔大寺を出立し、大坂越えの後〕大津賀に至る。 讃岐国府に至る。 | 道範一首 道範二首 道範二首 |

| 元号 | 西暦 | 月日 | 道範に関する記事 | 和歌 |
|-----------------------------------|------|---|---|--|
| 仁治四年 ← 寛元元年 *2/26 改元。 | 一二四三 | 13日 14日 15日 (2~3月) 3月21日 9月15日 10月21日 | 国府を出立し、讃岐守護所(長雄二郎左衛門)に至る。 宇多津の御家人(橘藤左衛門高能)の許に預けられる。 宇多津で、堂舎・僧房がある場所へ移る。 宇多津での日常。海中鱗類への廻向を行う。 善通寺参詣。弘法大師の聖跡を巡礼。 善通寺周辺に移住。 弘法大師の行道所(現出釈迦寺)登攀。 善通寺周辺の西行の滞在跡を見る。 | 道範一首 道範一首 道範一首 道範一首 道範一首 道範一首 道範一首 道範一首 道範一首 道範一首 |
| 寛元二年 | 一二四四 | 正月頃 6月15日 8月頃 | 善通寺の童舞装束調達等のため、願文作成。 多度郡田所入道の夢想を聞く。 淡路国に配流された同朋と和歌を贈答。 | 道範二首、 同朋二首 道範一首 道範一首 |
| 寛元三年 | 一二四五 | 10月21日 12月16日 | 仁治三年の事件で出雲国に配流された同朋・学円房法性逝去。訃報は二月一日、道範は五十日の阿弥陀護摩行を行う。 同朋・覚禅房尚祚が一月二五日に逝去したことを知る。尚祚・法性・道範は、覚海の嗣法の弟子。 | 道範一首 道範一首 |
| 宝治二年 | 一二四八 | 4月 6月2日 15日 | 高野山の道助法親王(後鳥羽院皇子、仁和寺御室)から、善通寺御影摸写の依頼。 京から絵仏師(鏡明房)が下向し、一三日~一八日の間に摸写する。 善通寺御影の摸写が上洛。 摸写、高野山に到着。道助法親王から報書。 | |

| 元号 | 西暦 | 月日 | 道範に関する記事 | 和歌 |
|------|------|--|---|----------------------------------|
| 宝治二年 | 一二四八 | 10月27日 28日 29日 11月17日 18日 | 伊予国寒川の地頭（小川六郎祐長）が建立した御堂の三尊供養の導師となる。近くにあった比女の八幡に参詣。 寒川の御堂で舞楽。 帰途、琴弾八幡宮（現観音寺市）に参詣。 尾背寺（現まんのう町）に参詣。 帰途、金刀比羅宮の西にある称名院に参詣。近くの松林に庵を結ぶ念々房と和歌を贈答。 （称名院の上品房からは一二月一四日付けの返状） 称名院近くの滝寺にも参詣。 | 道範一首 道範一首 念々房二首 （上品房五首） |
| 建長元年 | 一二四九 | 5月1日 5月21日 6月8日 6月12日 7月22日（ 23日 29日 8月4日 6日 7日 | 善通寺誕生院建立。道範、鎮壇法会を行う。 道範たち流人に対し、赦免の院宣が下る。 院宣・六波羅探題の下知状・東寺長者の書状が届く。 道範、病のため出発できず、四〇日程度の日数が経過。この間、讃岐の同朋と手紙を遣り取りする。 道範の病、小康。帰山の前に、白峯寺での伝法を依頼される。 善通寺を出立し、白峯寺に到る。 白峯寺で、伝法を行う。 白峯寺の本堂が修理され、曼荼羅供養が行われる。道範、大阿闍梨を勤める。 白峯寺を出立し、白山に至る。 | 道範一首、 同朋二首 |

| 元号 | 西暦 | 月日 | 道 範 に 関 す る 記 事 | 和 歌 |
|------|------|---|---|-----|
| 建長元年 | 一二四九 | 8日 9日 14日 15日 16日 17日 21日 | 白山を出立し、引田に至る。 引田を出立し、大坂越えの後、阿波国紀津（木津）に至る。夕方、船に乗り、牟野口村（現、撫養津周辺か）に移り、夜中に淡路国賀集に到着。 賀集を出立し、淡路国由良（紀淡海峡に臨む淡路島東端）に至る。 由良を出立し、大谷（紀淡海峡・和歌山側）に至る。 大谷を出立し、麻生津に至る（小紙片に拠る）。 高野山に帰山。 奥の院参詣。 | |

【注】

- (1) 高橋徳・安藤みどり・佐藤竜馬「『南海流浪記』洲崎寺本」(『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』八号、二〇一二年三月)。
 (2) 東北大学附属図書館狩野文庫蔵『南海流浪記』(函架番号三―七九〇七―一)にて確認。嘉永四年五月刊。本文は道猶の校訂、版元は「永寧書房 南紀高野山 山本平六」。道猶による嘉永四年の跋文2本を有する。
 (3) 『特別展 創建二二〇〇年 空海誕生の地 善通寺』(香川

県歴史博物館、二〇〇六年) 収載の「南海流浪記」の解題は、「慶弔二年四月五日に良学房英義が書写したもので、その後、に智莊嚴院、そして金剛三昧院に伝わったと考えられる」(渋谷啓一)とする。

* 貴重な資料の閲覧と翻刻掲載をご許可いただいた高野山大学図書館に感謝の意を申し上げます。